

“釜ヶ崎解放”を めざして15年

大阪市西成区の通称「釜ヶ崎」は東京の山谷と並んで日本でも有数の「寄せ場」があるところ。十五年前、ここに全港湾・西成分会が旗揚げした。その中心を担った泊寛二さんは、これまでの血のにじむ苦労はおくびにも出さず、「釜ヶ崎解放」の未来をみつめて、今日も日雇労働者に呼びかけを続けている。

新しい運動のエネルギーはどこに？

「現在の日本には60年、70年の安保闘争に匹敵する新しい運動のエネルギーは存在するの。あるとすればいったいどこに……」三年前、泊寛二さん（三八）は私的に訪れた講演会の二次会で、講師の吉本隆明氏にこう質問したことがある。全共闘世代の泊さんにとって「共同幻想論」の思想家の名はもちろんおなじみだったが、とくべつ

熱心な読者というわけではなかった。ただ、日頃から詩に関心をもつ泊さんには、詩人でもある吉本氏に単なる思想家として以上のこだわりがあった。

パーソナル・データ

●一九四七年一月二十八日、徳島県鳴門市生まれ。六八年、立命館大学文学部史学科入学。六九年同中退。反戦青年委員会を経て、全港湾西成分会結成に参画。一時、戦列を離れるが七一年五月復帰。現在、大阪市浪速区戸原橋在住。都中子夫人（三五）の間に一男二女あり。



全港湾建設支部西成分会書記長

泊 寛二さん
とまり

ともあれ、京都くんだりまで出掛けたい、高名な哲学者を前に「田舎芝居を演じる」はめになったのも、ここ数年とりつかれているアンニユイから抜け出すきっかけがみつかるのでは、という淡い期待感があつたせいだろう。

しかし、老哲学者からは、「時代の活力とはどこにあるとか、ないとかいう性質のものではない。君は真実は善、虚構は悪と考えているのではないか。たしかに青森のホッペの赤いお嬢さんもいいが、銀座の美しく着飾ったホステスも捨てがたい。極力の虚構にはより強力な虚構で対峙すべきときもある」

と、禅問答のような答えしか返ってこなかった。泊さんはいまも、ふとあの日のことを思いだすことがあるという。

取材の合間の雑談のおり、泊書記長はそんなエピソードを披露してくれた。全港湾建設支部西成分会は、釜ヶ崎（愛隣地区）の中心部に位置する萩ノ茶屋南公園、通称三角公園のすぐそばにある。日曜日の夕方とあって事務所には人気なく、ひっそりと静まりかえっている。話が少ししめつぽくなつたのはそのせいかもしれない。

七八年、築港から移転した現事務所は、もともと、同席の野崎健副委員長（三六）が住んでいたアパートだった。いま三人がコタツを囲んでいる会議室が組合員の手で

増築されたのは一昨年のことである。十一畳ほどのスペースで、壁はトタン板一枚だけ。冬の冷えこみ、夏のうだるような暑さは、さぞこたえるに違いない。

泊さんは、「今年こそは、クーラーを入れたいんですが、なにおん（組合）だから」と、苦笑する。

日雇い労働者が 闘う組合を作った

「一杯やりませんか？」の誘いにしたが、事務所を出ると、すっかり日は暮れていた。三角公園も闇につつまれ、周辺にたむろしていた労働者たちも姿を消している。近くの商店街のなかには浮浪者やヨツバライも目にはつくが、全体に整然とした感じで、違和感はない。三人が入ったホルモン焼屋も、どこにでもありそうなごく普通の店だ。

「釜ヶ崎が怖いというのは過去の話です。世間の目とは違って、ヤーさんの存在をのぞけば八〇年以降、ここほど平和な町はないと言ってもいい。それだけ矛盾が固定されてしまった一面もあるんじゃないか」という野崎さんの言葉を思い出す。

明朝の取材に備えて、分会に泊まることになった。別れぎわ、泊さんが「近くに賭場があるのでうるさいかもしれませんよ」

と注意してくれる。釜ヶ崎に暮らす日雇労働者の数は推定で一万八千人。ドヤ（簡易宿泊所）、飲食店、酒屋……この町にあるものはすべて、日雇労働者の稼ぎに依存している。サラ金や覚醒剤で彼らを苦しめている暴力団も例外ではない。

釜ヶ崎の歴史は、江戸時代の名護町の貧民街を明治の「内国勸業博覧会」の際、強制的に大阪環状線の外側へ追放したことに始まる。

一九六一年のいわゆる「釜ヶ崎騒動」――「夏の祭典」（山本敬一・全港湾西地方本部委員長）に示された釜ヶ崎労働者のエネルギーを背景に、全港湾西成分会が産ぶ声をあげたのは六九年五月。昨年八月、通算五〇〇〇号を達成した西成分会の日刊機関誌ビラ「大阪城」第一号（六九年五月二十六日発行）は、結成の模様をつぎのように報じている。

「5月23日夜、西成市民館で西成の日雇労働者が闘う労組を作った。我々は、資本家のすきな様にはさせない。我々は団結して我々の正しい要求を闘い取ろう。」

我々の要求は

- (1) 8時間労働、日当二千二百円よこせ！
- (2) オールナイト6050円よこせ！
- (3) 休業補償は日当を満額よこせ！
- (4) 休日労働日当は2割5分増出せ！
- (5) 労災休業補償最低1500円出せ！

- (6) ドヤ賃下げる。ナンキン虫追放せよ!
- (7) 天井2 M 10 cmよこせ、建築基準法守れ!
- (8) マンモスセンターに風呂作れ!
- (9) マンモスセンターの住居よこせ!
- (10) 無料宿泊所建てろ!

以上のスローガンを百五十人以上の参加者の圧倒的な支持できめた。

西成分会に強い支持結集!

結成大会には、大阪総評帖佐議長も結成を祝い、団結しようとの決意を表明された。四百万の労働者が我々を支持している。全港大阪港支部、建設支部からの連帯の挨拶を受けた。我々は権力の弾圧をはねかえして行けるのだ。一人一人が力をつくし闘おう。

労働者の団結は役員におんぶしてはだめだ。堂々と一人一人が闘おう!

当時、泊さんは二十一歳。立命館大学を一年で中退のち反戦青年委員会で活動中に、組合結成の立役者のひとり尾上文男さん(大阪総評オルグ)の誘いを受け、運動に身を投じた。

「結成一カ月前から、新今宮駅前で、ビラ配布などを手伝っていました。ただし、役員に名を連ねてはいったものの、この運動が自分にとって何なのかはおろか、組合結成の意図、構想、方針など、どれひとつ整理されないまま巻き込まれていったというのが正直なところですよ」

社会の底辺に沈没する労働者の孤独

現在、西成分会に結集している労働者は五十人前後。全体からみれば微々たる数だが、日雇い雇用保険の獲得、反失業・国策樹立の闘争、悪徳手配師糾弾、ドヤ改革運動など、これまで分会が取り組んできた闘争の成果はすべての労働者に還元される。大阪府・市・大阪建設業協会を相手とする「ソーメン代」(夏の一時金)、「もち代」(冬の一時金)獲得の闘いも同じ。「もち代」は昨年、ようやく一万円を越えた。

釜ヶ崎の朝は早い。西成分会を出た四時半にはもう、ドヤから吐き出された労働者たちで道はあふれ始める。無言の行進がめざすのは、まだ明けきらぬ北の空に、黒いシルエットをみせる「あいりん」総合センターだ。

午前五時、巨大なシャッターが開くのを合図に、求人業者のマイクロバス約十台と千人余りの労働者がいっせいに西成労働福祉センターの求人広場(寄場)へなだれ込む。

車のフロントガラスにはられた求人票(ブリーダー)には「建土雑役、八〇〇〇円、5〜8時間」「トビ一〇〇〇円、弁当あり」と労働条件が項目別に記入されている。この表示をたよりに労働者は好みの仕

事を選ぶわけだが、西成分会の再三の申し入れにもかかわらず、路上求人、無表示車による顔付け求人(常連を選んで雇用すること)など違反業者があとを絶たないという。

西成分会の日課が始まるのもこの時間である。シャッターのオープンと同時に寄せ場の片すみに木製の机が出される。この机が日刊ビラ「大阪城」を手渡す組合のインフォーマー・ションとなり、ささいな愚痴から業者との労災問題のこじれまで、労働者の種々雑多な相談を受け付ける窓口ともなるのだ。

釜ヶ崎の労働者はそのほとんどが、地方出身の単身者である。ある者は戦争で、ある者は農村の崩壊で「土方」となることを宿命づけられてきた彼らのなかには、人との付き合い方すら知らない人もいます。そこから生まれる孤独感が彼らを酒に走らせる大きな要因」と泊さんは言い切る。

「だからこそ、酒飲んだらあかん。体気つけや」と、本来、家族がはたす機能を組合が代行しなければならぬ局面も出てくるわけです。もちろん、労働者の弱さに対応するには限界もありますが、集団的に補完し合って、個々の弱さを克服していこうと考えています」

実は、泊さんにも孤独な時代があった。高校卒業と同時に「経済的な理由と、時代への適応能力のなさ」から、たったひとり

で故郷の徳島県を離れ大阪へ。その後三年間、職業を転々として暮らしていた。

「田舎からボツと都会に出て、心理的には集団就職の青年と同じ状況でしたね。心を許す友人もなく、生きる方向もみいだせない。自分では必死だったが、今から思えばアナーキーで無節操な時代でした」

そんな泊さんの心のすき間を埋めてくれたのは、皮肉にも釜ヶ崎に連なる歓楽街「新世界」の大衆的ムードだった。

午前八時。組合員の活動はセンター二階にある職安窓口に移る。白手帳の認定が始まるのだ。

白手帳とは、日雇い労働者に発行される雇用保険手帳のこと。この手帳に業者からもらった印紙をはり、二ヵ月で二十八枚になると、その翌月から保険金（アプレ手当）が受けとれるというしくみである。制度が始まった七〇年には六七〇円だったアプレ手当は、現在、六二〇〇円にまでなっている。

支給希望者は、まず職安窓口到手帳を預け認定を受ける。それにパスするとその日の午前中にはアプレ手当が渡される。この日は一時間足らずの間に約六千人の労働者が認定を受けた。昔は職員の暴力行為の糾弾、列の割り込みによる労働者同士のケンカ仲裁など、組合員も大忙しだったが、最送はそうしたトラブルもめつきり減ったという。

労働者自らが展望

を切り開く力を

八一年、西成分会は結成十周年を記念して二冊の本を出版した。第一分冊「全国の建設土木労働者団結せよ―釜ヶ崎解放10余年の歩み―」と第二分冊「日本の建設産業―魅力ある建設労働を求めて―」である。組合の歩みと所属企業をもたない労働者を組織していくときの原則などがまとめられた第一分冊で、泊さんは自分たちの思想的立場を、

「日雇労働者は自分で展望を開く力を形成しえろと考えるし、釜ヶ崎労働者もみずからなかなかその力は存在すると確信します」

と、規定した。

七九年、それまで専従活動家が務めていた分会長のポストに労働者出身の山本五郎さんが就任した。十代から土を掘っていた人が組織のトップに立ったことは意義深い。反面、組織の行動力が犠牲になっている現実もある。

「ちょうどサーカス会場で鉄棒をやっているようなもの。空中ブランコの派手さはないが、観客の労働者に、一緒にやりませんか。と呼びかけている段階です」

その後の五年間の活動でとくに力をいれてとり組んでいるのが、「教育文化運動」の

充実である。一般的に、労働組合にとって教育活動がいかに大切であるかは論をまたないが、企業の体制や内容をつくっていく必要のある日雇労働組合にとって「教育活動の展開と教育理念、教育機構の形成は死活的な意味をもつ」という。

七九年二月、行政に働きかけて実現させた、「第一回労働安全講座」を皮切りに、学習会活動も、月一回のペースで定着。毎回三十人〜五十人の参加をかちとっている。また、八一年九月、三角公園で行われた「たそがれコンサート」では府立音楽団が出演、約五百人の労働者が集まり、以後、恒例化されている。さらに同じ三角公園での屋外映画会など積極的な文化活動がくりひろげられつつある。

「職業訓練法、社会教育法などすでに保障されている制度の活用はもちろん、行政主導でない真に大衆が主催者になれるようなイベントを追求したいですね」

連帯を求めて孤立を怖れず、を座右に

釜ヶ崎は、数々の矛盾を残しながらも変わろうとしている。関西新空港建設工事に照準をあてた先行投資で、約二百五十軒ある簡易宿泊所も改装工事が相次ぎ、五、六階建てのモダンなホテルも増えている。当然ドヤ代も上がった。最低が五百円から八

百円に変わり、千円台も珍しくない。

労働者の世代交代も急速に進んでいる。

と同時に、日雇労働者は過去をひきずって
いるという従来のイメージが塗り変えられ、

釜ヶ崎を気軽に活用するソフトな感じの労働者も増えている。

「運動が旧来のパターンではついていけなくなりつつあることは事実です。これまで

の経験をつまみながら状況の変化に対応できる方針を摸索中です」

そのためにも理論戦線をリードする政党の真価が問われる。が、住民票をもたない、つまり票として

の力をもたない釜ヶ崎の日雇労働者に対する政党からのアプローチは弱い。

「このままでは、地道な日常活動に追われ不安定な経済的基盤しかもたない大衆団体の我々が、本来、政党や学者がやるべきことを肩代わりしなければならぬ。政党の側にも根本的な人間観の変革が必要なのではないでしょうか」

常用労働組合の日

雇への根強い偏見、党の利己的な政治主義的発想への泊さんの憤りは大きい。そんなとき、泊さんが思い浮かべるのは全共闘時代である。あの運動のなかには未熟かもしれないが、もっとラディカルな政治意識、直接民主主義が息づいていた。

泊さんの好きな言葉は、当時のスローガンでもあった「連帯を求めて、孤立を怖れず」。つい数年前は、孤立に重心がかかってアンニュイになったこともあるが、最近「しかし、孤立しないように努力しなければならぬ」を付け加える余裕もできた。

たとえば、吉本隆明の言葉を、

「これまで、我々の活動は赤いホッペの田舎娘を目指して来たように思っています。情報化の進む現代社会で、有効に闘うためには、真実をふまえた虚構、イメージを活用する技術を運動主体も学ぶべきである」と、自分なりに解釈してみたという。

泊さんや野崎さんらいわゆる全共闘世代が十五年をかけて構築してきた「釜ヶ崎解放」の運動を引き継ぐものは誰か。

「釜ヶ崎をソフトに活用する若い労働者のなかから次の釜ヶ崎を担う新しいタイプの活動家が現われる」

泊さんには、そんな予感がある。

(林 光太郎＝関西共同デスク)

